

都市生活困窮者をめぐる相互協力の地域社会学 —日本の中核都市名古屋とベトナムの首都ハノイの比較社会論—

長坂康代

キーワード：移動者包摂、疑似家族、地縁、コミュニティ、共同

概要：名古屋駅周辺では多くの野宿者（ホームレス）を見かける。それを支える諸団体があるが、一時的に支援する側とされる側のコミュニティができて、ホームレスは社会から切り離されて疎外されている。一方、ベトナムの首都ハノイでは、支援組織がなくても多様な日雇いの仕事で現金収入を得て生活することが可能である。ホームレスがほとんどいないのは、民衆間でのセーフティネットワークが機能しているからである。

1. はじめに

2014年4月に愛知大学名古屋キャンパスの裏手に事務所を移転した「笹島日雇労働組合」（以下、「笹日労」）は、大西豊委員長（以下、大西）¹を中心に、日雇い労働者やホームレス支援だけでなく、在日外国人労働者の権利保護に努めたり、障がい者自立支援施設への協力をしたりするなど、一般社会から排除されたり、見下される人びとのすくい上げに日々奮闘する民間団体である。

大西は、野宿からの脱却—日雇い労働者・ホームレスの生活保護受給による住居の確保—により、コミュニティが解体されたという。他の支援団体も行政による居宅生活保護を推奨しているが、大西は、雨風凌げる住まいを得た次の段階、つまり、これによって個人がバラバラにされたあとの共同性のつくりかたを考えていく必要性を訴える。

東南アジアのベトナムの首都ハノイにおい

ても、不安定な立場である近郊の村からの出稼ぎ労働者が都市経済を支えている構造があるのは、日本社会と同じである。だが、経済格差が広がっているのに、首都ハノイではホームレスは限りなく少ない。インフォーマルなネットワークで何らかの形で住居の確保がなされ、その日から天秤棒1本で日銭を稼ぐ仕事がある。また、村の友人ネットワークや都市での人脈で、結果的に都市民ネットワークに包摂され信頼をうけ、ある程度安定した稼ぎを得ることもできる。NPO団体など必要なく、ネットワークを意識的に組織化する必要もない。

そこで、名古屋の支援活動とハノイでの出稼ぎ労働者の比較考察からセーフティネットワークの重層性や共生力の重要性を提示する。

2. 名古屋のホームレス支援

名古屋駅周辺は、空き缶集めをしていたり、

自転車の後ろに空き缶の入った大袋を掲げた自転車をこいだりする人を頻繁に見かける。駅裏の公園では、ホームレスがグループ化して空き缶を収集し、売上金を分配して現金収入を得ている。だが、東京では、17区14市で「資源ごみ持ち去り禁止条例」が施行され、国がホームレスによる空き缶収集を「目指すべき自立の姿ではない」とした。都市におけるホームレスへの視線は、より厳しい状況になってきている。

2-1. ホームレスの実態

中日新聞(2013.9.14)の記事によれば、2013年、統計上では、ホームレスは減少している。2003年には25296人から8265人(約3分の1)、名古屋でも1788人から305人(約6分の1)である。名古屋市は、その理由を2002年の「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」に基づく支援策の拡充によるとしている。そうして、市内3カ所に自立支援施設と一時宿泊施設を建てて、ホームレスに入所するように進めてきたのである。そこでは、原則6か月の入所が可能で、利用者はその間に生活保護を申請したり、職や住居を探したりすることになっている。

筆者が若宮大通公園で出会ったホームレス男性は、自立支援施設を抜け出してホームレスに戻っている。一時的に宿泊施設に入ることができても、見知らぬ人との集団生活では、かえって「孤立」した生活になり、不安に感じたからだという。行政の施策によって、「表向き」にはホームレスの減少につながっているが、それまで培ってきたネットワークが絶ち切れて「隔離」される実態がある。大西も指摘するように、生活保護の受給によってコミュニティが絶ち切れ、一般社会に復帰できるとは限らない。また、生活保護を受けてもギャンブルで使い込んでしまい、配食に頼る者も多いのである。

名古屋でのホームレス支援活動は、各支援

団体によって、東京・山谷、大阪・釜ヶ崎同様、食事の配布(炊き出し)、日用品の配布、訪問活動、福祉活動、医療活動、夜間パトロール、行政への要求など、多岐にわたっている。しかし、大西が「キタナイモノニフタ」と評するように、現代でもホームレスは社会から無視され、一部の支援団体によってセーフティネットが維持されているのが現状である。それも、行政による公園テントの強制排除ⁱⁱや「生活保護」によって、ホームレス・コミュニティが損なわれている実態がある。

大西は、ほぼ毎日、笹日労の事務所で寝泊まりをしている。この事務所には、行き場がなくて大西と泊まり込む男性、生活保護で住居を得たもののビールを持参して話し相手に事務所に来る男性、就職に向けての準備を焦る男性、大西を慕って銀行からもらったカレンダーを数本渡しに来る女性、余剰の食材を調達してそれを温めて昼食を作りに来る男性、大西に窮状を訴える男性、組合の支援を受けて裁判に臨んでいる外国人労働者、ホームレス支援のために廃棄前のバナナを数箱置いていく業者と、さまざまな人たちが出入りしている。

大西の教示によると、笹日労に関連した人で、死者数は37年間で56名(男性52名・女性4名)であった。うち、不自然死は5名、外国人はのべ5名であった。なかには、セーフティネットから抜け落ちて「差別襲撃」によって死亡した人が1名いる(表1・表2参照)。渡辺は、無視の関わりが、差別や排除へとつながり、そこから襲撃と言った具体的行動へ向かっていくと考えられる[2010:110-111]というが、大西の資料からも、社会問題としての深刻さが浮き彫りになってくるⁱⁱⁱ。

2-2. 「してあげる」になりがちなホームレスへの支援活動

名古屋市内では、多くのボランティア団体

表1 「笹日労」関連 逝去者

期間	死者数	不自然死	男女比	外国人
1977～1995	4名	自殺 1名 交通事故 1名	男性 52名 女性 4名	外国人 5名
1996～2000	8名	水死 1名 差別襲撃 1名		【内訳】 ネパール人 1名 韓国人 1名
2001～2005	16名	事件 1名		
2006～2010	21名			
2011～2014	7名			
37年間 合計	56名	不自然死 5名	女性割合13%	外国人割合10.4%

大西豊氏による提供の資料（2013.12作成）に基づき、長坂作成

表2 平均寿命の比較

	「笹日労」関連	全国平均	
男性	59歳	79.59歳	—20.59歳
女性	63歳	86.44歳	—23.15歳

大西豊氏による提供の資料（2013.12作成）に基づき、長坂作成
（この全国平均の年度は不明）

が、ホームレスへの支援活動をおこなっている（表3参照）。笹日労による食事の配布や余興は、日曜の夜（不定期）に名古屋駅西口や、月曜や木曜に若宮大通公園のゲートボール場などで実施している。岐阜出身の路上芸人・えぐれ笹島（以下、えぐれ）は、辛い過去を背負い、重い病気と闘いながら、大西とともにホームレス支援をおこなってきた^{iv}。大西やえぐれは、自らの生活費から食費を捻出したり、えぐれが1日かけて調理したり配食したりと、経済的・体力的な負担が大きい。それでも、えぐれは、ウクレレを用いた歌で、大西とともにホームレスに寄り添ってきた^v。

大西は、炊き出しは「社会矛盾の隠ぺい」であるため、炊き出しは好きではないという。「炊き出しをしないで済む社会をつくるために炊き出しをする」という信念がある。つまり、ホームレスを「自閉させない」ために取り組む社会活動の一環として捉えているのである。

愛知大学前の六反公園付近の路上で寝泊まりしながら野良猫の世話をするホームレス男

性、笹島交差点で『THE BIG ISSUE』を販売する仕事を得て住居を確保した元ホームレス男性は、ともに「炊き出しには行かない」と言った。そのような活動を拒否するのではなく、今は自炊が可能な自分が一食を浮かせるために支援場所に行くことで、誰かがもらえるはずの一食がなくなるのが申し訳ないからというのがその理由であった。

このとき筆者が話に出した「炊き出し」とは、NPO法人「ささしま共生会」（以下、共生会）が主体となって、月曜・木曜に午後7時から若宮大通公園ゲートボール場でおこなう配食を指す。共生会は、寄付金によって各事業活動をおこなっており、その活動日時に関して確実性・信頼性がある（表4参照）。この炊き出しに関しては、同団体組織の「福信館」に所属する炊き出しグループが、さらに細かく分類され、月曜はカトリックの各教会、木曜はプロテスタントの各教会が持ち回り、調理、配食、片づけまでをおこなう。第4月曜は、春日井市の福音ルーテル教会が担当することになっている。本来、その場で調理して配布するのだが、火を使うと高架に設

(4)

都市生活困窮者をめぐる相互協力の地域社会学

置された火災報知機が鳴るため、いわゆる「炊き出し」はできない。そのため、担当する各教会が、昼ごろから準備をして出来上がった食事を福信館の車で現地まで運んで配食する。時折、衣類の無料配布や日用品の配布もある。整理券を配布する際に、冬であればカイロを数枚配布し、路上での生活を援助する。自分が何時間も並ぶ代わりに石や空き缶を路上に置いて、一食を得るために夕方から番をとる。生活保護の受給によって並ぶ人が少なくなり、生活保護費を受給する第一週は特に少ないというが、それでも100名を超える長蛇の列ができる。

このほか、「笹島診療所」^{vi}による医療活動がおこなわれる週もある。また、配食前の余興として、各教会やそれを手伝う大学生ボランティアによる将棋や囲碁、ピンボール、映

画の上映、カラオケなど趣向を凝らしたイベントがある。ホームレスだから一食さえ満たされればよいというのではない。他者とコミュニケーションを図ったり、生きるための生活に潤いをもたせたりするには、このような余興も必要なのである。だからこそ、ここには、住居が確保されている人、将棋をやるためだけに来る人も食事の配布に集まってくる。なかには、毎日居住場所を移動するため、リヤカーで全荷物を持って毎週必ず来る男性、わざわざ電車に乗って食事にくる女性、人がたくさん集まるからと女装をする男性もいる。日中のゲートボール場は、夜にはホームレスを交えたコミュニティと化するのである。

ただし、これらが布教も兼ねたボランティア活動でもあるということを前提にしても、

表3 通常の炊き出し案内 [2013]

曜日	時間	場 所	最寄駅	備 考
月	16:00	中村公園	中村日赤	
	19:00	若宮大通公園 ゲートボール場	矢場町	第2・第4は生活相談あり
火	13:00	若宮高速下 白川公園近く	中村日赤	
	19:30	白川公園 南高架下	伏見	
水	12:40	白川公園 南側広場	伏見	
	16:30	西柳公園 (オケラ公園)	名古屋駅	
木	19:00	若宮大通公園 ゲートボール場	矢場町	第1・2・4は17:30-無料散髪あり
金	16:00	中村公園	中村日赤	
土	11:00	若宮大通公園 千早交差点高架下	鶴舞公園	第4(仲間の日)
	16:00	若宮高速下	伏見	第1・第3
	16:00	栄公園	栄	第1・第3
	18:30	若宮大通公園 ゲートボール場	矢場町	第5
	18:30	いこいの広場	久屋大通	第2・第4
	20:30			第1・第3
日	10:00	いこいの広場	久屋大通	第5
	12:00	景雲橋小公園	丸の内	
	13:30	城西公園	浄心	14:10まで整理券配布 食事は教会にて
	15:30	千早小学校交差点		第2
	19:00	名古屋駅西口	名古屋駅	隔週?時々 18時-大西・えぐれ

大西氏による提供資料を基に長坂作成

表4 「ささしま共生会」の活動

事業名	対象者数	実施期間	実施回数
炊き出し	平均216名／回	2012年1月～	89回
野の花	平均177名／月	2012年4月～	113日
ひだまり	平均287名／月	2012年4月～	109日
散髪	平均23名／回	4月～9月	15回（総利用者数356名）
居宅訪問	36名	4月～	124回

出典：「特定非営利活動法人ささしま共生会」（2012.12.15発行）

ときに支援側に「してあげる」意識が高くなることは、自省の課題として、今後乗り越えていかねばならないだろう。共生会の理事・神父の元で「ボランティアをするためのレクチャー」を受け、余興や配食を手伝う大学生であっても、「やってあげる」自分に自己陶醉している風がときに見受けられるのは、残念である。「与える人」の視線は、「与えられる人」を見下ろす形になってしまう。その溝は決して埋まることはない。ホームレスは、学生からも社会の枠組みからはみ出た人というレッテルを貼られたままになってしまう。それを「与えられる人」は敏感に察し、その供与の気持ちが時に立場の弱者への圧力に代わってしまうこともある。

この姿勢の違いからか、理事の活動と大西の活動は対立することがある。大西は、10年以上受け入れられなかった。ホームレスが社会から無視されるように、ゲートボール場での笹日労の活動は、支援団体から排除されている。共生会による食事の配布が主食中心なので、大西たちは、軽食を提供するという配慮をおこなう。日用品や衣類を配布する方法、そして、えぐれが12年間続けてきたホームレスの前でホームレスの歌をうたうことで距離感を縮めるなどの大西たちの方法は、今でも「宗教系ボランティア団体」の一部の人には受け入れられていない。各団体が対立せずに協働する姿勢をもつよう改善を図ることが、「炊き出しをしないで済む社会をつくるために炊き出しをする」一歩につながるはずである。

2-3. 支援団体が協働する越冬闘争

渡辺は、「社会運動への参加を通じて、野宿者と支援者が『仲間』という『集合的アイデンティティ』を形成する。この『仲間』として連帯することが、運動の自己目的である。社会運動を支えるネットワークには、かつての社会運動の主役であった労働組合や、ボランティア活動の前身である宗教団体が関与しており、これまでの社会運動との連続性がみられる。野宿者問題に対する新しい対応策が打ち出され、行政と民間の協働関係づくりが重視されるなかで、労働組合と宗教団体のNPO化と社会運動家・ネットワーク化が進行する。両者の関係をどのように形成していくのかは、これからの課題である」と述べている〔渡辺：112-113〕。

大西の教示では、名古屋には、ホームレス・日雇労働者の当該者と支援者の恒常的連絡機関として、笹日労、共生会、各炊き出しグループ、パトロールグループ、診療所などで構成されている「笹島連絡会」があり、これが「越冬実行委員会」や「夏祭り実行委員会」にもなっている。

特に、越冬支援活動（越冬闘争）^{vii}でいうと、前段として、毎年、国、愛知県、名古屋市との団体交渉がおこなわれている^{viii}。大阪・釜ヶ崎の事情に精通し、東京の事情にも詳しい大西は、行政を対象に、このような恒常的な交渉の窓口を持っているグループは少ないのではないかという。こうした民間側からの要請・準備があって、昨年も名古屋駅周辺の西柳公

園（通称：オケラ公園）で、「一人の死者も出さない越冬にしよう 仲間の命は仲間を守ろう」をスローガンに掲げた「越冬闘争」がおこなわれた。とかく各団体が縄張り意識を持っており競い合う傾向にあるが、「越冬支援」や「夏祭り」になると、各支援団体が横とつながって活動をしているのである。

昨年の越冬闘争は、12月28日に支援者や愛知大学の学生有志が西柳公園に会場を設置した。そして、当日夕方に「越冬突入集会」をおこなってから1月4日の撤収までの間、「共同炊事」と銘打つ昼と夜の炊き出し、医療活動、法律相談、夜回り（12月28日・31日・1月2日・3日）、交流会（1月2日）、衣類提供、散髪、カンパ活動（12月30日・1月3日）、餅つきやカラオケといった余興など、さまざまな「行事」がおこなわれた。

越冬闘争の配食は、支援する側・される側が垣根を越えて共に作業するようになっている。愛知大学の学生も支援者やホームレスから調理方法を教えてもらい、寒空の下、冷水でサトイモを洗ったり、薪をくべたりするなど炊事の手伝いをしたり、名駅前でカンパ活動に参加した。共同作業によって、学生は、差別や偏見の対象であり異質な他者・ホームレスも「人間である」ことに気づく。こうして、「ボランティア」や「してあげる」概念から脱却して、学生が社会の矛盾や枠組み、福祉制度について疑問をもつことが、日本社会での相互扶助の在り方を考える一助になっていくはずである。

3. ベトナムの地域社会が築くセーフティネットワーク

ベトナムの首都ハノイでは、ホームレスがほとんどいない。それは、人的ネットワークで何らかの形で「生きる」ことが保証されるからである。盲人が鐘を鳴らしながら箒やうちわを売り歩いていると、都市民がずっと近

寄って何本か買う。路上のカフェでは、明らかに低所得者の身なりの高齢者が、客に対して束にした爪楊枝を売りつける。それでも、客は文句を言わずにさっと代金を出してまとめ買いをする。そこに、「してあげる」意識はなく、無理に関わることも無視することも無い、当たり前行動様態がみられる。

ハノイでは、その日から天秤棒1本で日銭を稼ぐ仕事がある。また都市民との間に信頼関係ができ、都市民ネットワークに包摂されると、出稼ぎ労働者がさらに出稼ぎ労働者と都市民をつなぎ、村と都市をつなぐ都市ネットワークを生み出していくことになる。

そこで、その事例として、ハノイの中心部である旧市街の外にある卸売市場・ロンビエン市場と、旧市街内で塗料販売店が連なるハンホム通りでの出稼ぎ労働者の包摂について考察する。

3-1. 都市での労働の入口—卸売市場

ハノイの隣に位置するフンイエン省出身のリュエンという名の女性は、夫と子ども2人をフンイエン省の村に残して、ハノイに出稼ぎにきて15年以上経つ。稼いだ現金や、村にはないお洒落な子どもの衣類、種類が豊富な生活雑貨を届けるために、1~2ヶ月に1度は帰省することになっている。

リュエンは、ハノイ外周のフックタン地区という出稼ぎ労働者が集まる地域で同郷者らと共同生活をし、卸売市場で深夜から早朝までロンビエン市場で、天秤担ぎ（ガイン）の仕事をしてきた。この地区は、観光客から見えないように高い壁で仕切られている。リュエンたちの住まいは、かろうじて電気は通っているが、ガス・水道は整備されておらず、不衛生な生活環境である。リュエンたちが寝起きする部屋で、時にまったく知らない人が寝ていることがある。同郷でなくても、1泊10,000ドン（約50円）で泊まらせる。出稼ぎ労働者同士のネットワークである。情報提供

をして仕事を見つけさせるのである。

リュエンは、通常は午前3時～午前7時ごろまでロンビエン市場で仕事をする。旧暦1日、15日は荷が多いため、午前1時には、リュエンを頼りにする小売り業者から運搬依頼の連絡が携帯電話にかかってくる。

ロンビエン市場は、果物・魚・野菜を取り扱う卸売市場である。果物だけを例にとってみても、深夜から早朝にかけて国内外から集められた果物の搬入と搬出がおこなわれている。市場内の卸業者から小売業者まで、果物を大量に購入する人がこの市場を利用している。

卸売り業者の果物販売員(41歳・女性)は、21時から8時までの11時間、市場で働いている。帰宅後、子どもを送り出したり家事をしたりして、11時に朝食を摂る。14時に就寝し19時に起床する。20時には出勤の準備をする。これが毎日続くので、疲れが取れず、慢性的に体がだるいという。ザボン売り場の販売員(49歳・男性)は、19時から9時までの14時間を市場で過ごし、労働がきついというが、重労働は、「ガイン」と呼ばれる天秤担ぎや「セーダーイ」と呼ばれるリヤカー曳きである。

ガインの仕事は、120cmほどの長い竹の棒1本と紐2本さえあればできる。都市の労働としては、社会ネットワークも関係なく、誰でも始めることができ、投資が少なくても現金収入を得ることができる仕事である。ただし、重労働で低賃金なため、ガインは出稼ぎ労働者が担っている。

市場内で棒をもって歩いていると、卸売り業者や小売業者が「ガイン オーイ」と声をかける。ガインは天秤棒を使って業者に委託された荷物を運ぶ。運搬料は、リンゴ箱で1個約2,000ドンである。業者の信用を得ようになると、「固定客」がつく。つまり、毎日確実に収入を得ることができるようになる。ラグビーボールほどの大きさのベトナム

産スイカを何十個も入れた大きな段ボールの重量は50kgを超え、100kg以上になることもある。こういったスイカなどの荷をガインが運搬する場合は、手の空いているガインに頼んで2人で組み、竹の真ん中に荷をつけた紐を括り、竹の両端を2人で担ぐことになる。

このような大きな荷や大量に運ぶ場合、天秤ではなく、リヤカー(セーダーイ)が都合よい。ロンビエン市場のセーダーイは、登録制で、行政が指定する荷台が必要である。市場内で使用できるリヤカー数も限られており、誰もがすぐにセーダーイになれるわけではない。つまり、市場での天秤担ぎとしての実績次第である。

2008年6月、リュエンは、市場で同時期から天秤を担いでいる旧知のロイと2人でリヤカーを1,200,000ドンで購入した。毎月の保管料として1,000,000ドンかかるが、天秤の何倍も多く荷を運ぶことができるので、これらの費用はリュエンとロイと折半している^{ix}。

ある日、リュエンは、26kgの青マンゴの運搬を、1袋2,000ドンで請け負った(2010年3月23日)。リヤカーだと1回で11個運ぶことができるので、22,000ドン(1人あたり11,000ドンの儲け)になった。こうして一度に得られる現金収入が倍増する。運搬作業は毎日なので、仕事ぶりで信頼関係ができると、新たな依頼者が出てくる。たとえば、小売業者に依頼されるだけでなく、市場外に隣接された冷凍倉庫にブドウやリンゴを保管している卸売業者が、当日の販売に必要な個数の運搬や追加の運搬を頼んだり、マンゴーやランブータンの入ったプラスチック製の大量の箱を市場外に持って行ったりするのを依頼することもある。

国の経済開放政策でハノイにも海外からの多種多様な果物が大量に入ってくるようになった。卸売市場では、物流の管理にコンピューターは導入されておらず、運搬も機械化を進めていない。そのため、多くの販売員

や運搬人を必要とする。そこに、現金収入を得るために地方から出てきた出稼ぎ労働者が集まってくる。リュエンも、他の出稼ぎ労働者同様、ロンビエン市場で天秤棒一本の労働からスタートした。約10年経って周囲の信用を得て、リヤカーを共同購入し、より安定した収入を得ることができるようになった。そして、それを村に送金する。都市経済の発展は、出稼ぎ労働者がその一端を担い、村の経済にまで浸透していく。都市と村落が結びついて雇用を生み出しているのである。

3-2. 都市民ネットワークへの包摂—塗料販売店の販売員

リュエンは、ロンビエン市場で働き始めて1年後、当時、旧市街内のハンホム通り8番の塗料販売店で勤めていた同郷の知人に紹介してもらい、市場労働後に8番で販売員として勤めるようになった。

ハンホム通りの塗料販売店で扱う商品は、ベトナム、タイ、台湾、中国、日本、韓国、オーストラリアなど世界に広がり、経済開放が進展していること、そして、グローバル化していることがここに判明する。経営者、家族従業員、雇われ従業員が働いている。雇われ従業員は、地方から出てきている出稼ぎ労働者が多い(表5参照)。

8番の末娘のガーが新規で塗料販売店を開くとき、リュエンはガーの店の従業員になった。家族が店番をすることもあるが、人手不足や男手が必要なときは、チョーハン(荷物運搬バイク)や近隣の店の販売員に臨時報酬を渡して仕事を頼むこともある。

従業員の給与は、経歴や働きぶりによって異なる。月給制だが日割り計算すると、ハノイの物価上昇もあり、40代女性リュエンの日給は、2007年50,000ドン、2008年に60,000ドンから70,000ドンへと上がっていった。ハンホム通り5番の販売員の親族で、ナムディン省から出てきた20代前半の男性の日給は、

30,000ドンであった(2007年9月時点)。しかし、この販売員は、仕事が間に合わないため、店側が短期間で辞めさせた。今度は、新市街にある民間の職業紹介センターで販売員の募集をした。そこに登録していた30代の女性トゥイが、紹介センターを通して14番に面接にきた。このとき、ガーは紹介センターに手数料として400,000ドンを支払っている(2008年3月)。販売員とはいえ、化学物質の詰め替えや、搬入・搬出の手伝いといったリスクや重労働を伴う仕事である。ロンビエン市場同様、出稼ぎ労働者は都市民が敬遠する仕事をおこなうのである。店主は「塗料の販売員はこれまでの仕事よりも気楽な仕事」と説明して、トゥイに納得させて雇用にこぎつけた。トゥイは、ハノイ市内の市場での犬肉の販売や事務員としての経歴を考慮されて、初任給50,000ドン(日給)から2008年7月には60,000ドンに上がった。

ハンホム通りでチョーハン(荷物運搬バイク)をする男性からの紹介で、同郷のホアが働き始めた。ホアの義妹が、ホアの紹介で勤めることになった(2009年8月)。リュエンの紹介で、リュエンと同じバラックで寝泊りするハタイ省出身の24歳の女性が、新従業員として働くことになった(2009年9月)。このように、雇用の大半は、ハンホム通りで働く従業員の紹介である。つまり、雇用主は明確な仲介者を通してフィルターにかけているのである。

2010年1月、店主のガーは塗料販売店を辞めて他の事業を起こした。しかし、長年リュエンの仕事ぶりを見てきた4番の塗料販売店は、これを機にリュエンを雇用することにした。それによって、リュエンの給料は、月収で2,500,000ドンから4番では3,000,000ドンになった。夕食も店主や家族従業員と食べるため、日常生活の出費が少なくなり、その分を仕送りにあてることができるようになった。

ガーから二束三文で譲ってもらったチョー

表5 ハンホーム通り 塗料販売店雇われ従業員数 (2007年8月)

番号	従業員数	氏名	属性	年齢	出身地
2	2	ハー	F	20	ハナム省
		ズン	F	19	ハナム省
4	1		F	45	タインホア省
8	家族のみ				
10	2	ゴック	M	23	ヴィンフック省
		ルウ	M	20	ヴィンフック省
12	4	フォン	F	22	タインホア省
			F		タインホア省
		ホア	F	19	フンイエン省
		フン	M	25	ハノイ市
14	4	ドン	F	50	ハノイ市
		トゥアン	F	47	フンイエン省
		リュエン	F	39	フンイエン省
		フォン	M	25	ハナム省
22					
26	1	タイン	F	23	フンイエン省
28	4		M		タインホア省
			M		タインホア省
		フォン	F	33	フンイエン省
		ヒエン	F	33	フンイエン省
30	5		M		ナムディン省
			M		ナムディン省
			M		ナムディン省
			F	25	フンイエン省
			F	30	ハノイ市
36A	1		F	36	ハノイ市
40	6		M		不明
			M		不明
			M		不明
		アイン	F	31	ハノイ市
		ホア	F	30	ハノイ市
			F		ハノイ市
番号	従業員数	氏名	属性	年齢	出身地
3	7		M		タイビン省
			M		タイビン省
			M		タイビン省
			M		タイビン省
			M		タイビン省
			M		タイビン省
			F		フンイエン省
5					
7	5		M		ハタイ省
			M		ハタイ省
			M		ハタイ省
			M		ハタイ省
			F		フンイエン省
9-24	12		M		ハノイ市
			M		ハノイ市
			M		ハノイ市
			M		ハタイ省
			M		ハタイ省
			M		フンイエン省
			F		ハノイ市
			F		ハノイ市
			F		ハノイ市
			F		ハタイ省
			F		ハタイ省
			F		ハタイ省
13	家族のみ				
17	1	ハン	F	35	ヴィンフック省
19	家族のみ				
21	2	チャー	F	20	フンイエン省
			F		フンイエン省
27	10		M		不明
35	1		F		不明

(注) 番号は、ハンホーム通りの住所に対応する
2007年の聞き取り調査を元に長坂作成

ハン（運搬バイク）用のバイクは、出稼ぎ労働者が集まるフックタン地区から販売店のあるハンホム通りまでの通勤や、村へ帰省するのに大変便利であった。しかし、3,000,000ドンで売った（2010年3月）。そして、その代金を村の自宅で使う韓国製の冷蔵庫の購入に充てた。また、ガーからリュエンの退職金代わりとして韓国製の薄型テレビを受け取り、村に持って帰った。

リュエンは、ハンホム通りで働くことで、都市民ネットワークに包摂されていく。そしてその仕事ぶりから信頼を得ることで、より収入を得ることにつなげ、それを村に還元する。先述のロンビエン市場と塗料販売店の違いは、雇用におけるネットワークの有無である。地域社会で他者を受け入れていくのにフィルター、つまり、都市民衆も出稼ぎ労働者をつなぐ横のネットワークが必要になるのである。

3-3. 茶屋をめぐる「疑似家族」形成

ハンホム通りの一角、歩行者用公共道路上のわずか1.5m四方の空間を利用して、早朝の6時30分から夕方の16時まで開く、路上の茶屋がある。土地の者も移動者も、こういった路上の一定の場所に店を開く固定茶屋を利用する。ハノイでは、茶屋を核とした地域社会ネットワークがはられ、茶屋をめぐる社会性が創り上げられている。

このハンホム通り角の茶屋で扱っているのは、ベトナムの緑茶（タイグエン茶）1杯500ドン、タバコのバラ売り1本500ドン、水タバコの葉1袋2,000ドン（道具代は無料）、ガム1個500ドンであった（2007年当時）。路上のコーヒーが1杯7,000ドン程度だったことを考慮しても、誰もが利用できる安い代金である。

そのため、茶屋の客は多職業であるが、特定の階層化が認められる。主な茶屋の利用者は、ハンホム通り界隈の経済的な中流層（家

族従業員）から下層（日雇い労働者）である。そうした近隣住民や地域の馴染み客が、店主に代わって客に茶を入れたり、代金を受け取ったり、開店準備や片付けを自主的に手伝っている。つまり、茶屋には、出稼ぎ労働者を地域社会へ取り込む機能もある。

茶屋には地域社会への参入の窓口機能もある。さらに、職業や階層を限定しないため、幅広い層が茶屋を利用している。こうして、ゆるやかに、地域を超える地域社会ネットワークがはられ、茶屋をめぐる重層的な社会性を作り上げている。夕方から同じ場所で茶屋を出す地域住民の女性も、午前の茶屋に来て茶を飲む。午前の茶屋の家族が、夕方の茶屋を訪れることもあるし、自分の家の茶屋の営業時間帯であっても、別の近隣の茶屋でタバコを吸い、茶を飲み、雑談することもある。茶屋を通した持ちつ持たれつの隔たりのない地域社会が広範にひろがって重層的にネットワークを形成している。

路上の茶屋には、10代から70代まで、老若男女を問わず多様な層を受け入れる集積機能がある。新参者に対して地域社会へ受け入れる機能的機能もある。さらに、売買の場としての簡易市場的な機能のほか、客が途絶えることなく、出稼ぎ労働者が1人で10回以上も利用するほど地域社会にゆるく開かれたパブリック機能もある。

茶屋は、ジェンダーも階層も年代層も職業も違う者が集う場でもある。近隣住民や地域で働く者の交流の場でもあり、新参者に対しては、必ず身上チェック（居住地・年齢・職業・家族構成の確認）がおこなわれる。古参の連れ人であれば、その関係も問われる。茶屋は、この人物照会機能によって地域社会の安全保障をつかさどり、頻繁に茶屋を利用する出稼ぎ労働者らもコミュニティ意識を共有してフィルターの役割を果たしている。ここに、出稼ぎ労働者も包摂される。ゆるやかに地域を超える地域社会ネットワークが張ら

れ、人びとは重層的な社会ネットワークと複合的な社会を創り上げているのである。

4. まとめ

日本は、ホームレスという名付け・枠組みを作って社会から結局は排除して差別化を図り、それを支援の対象としている。笹日労の大西は元日雇い労働者として同じ視点で不安定な雇用・不安定な生活を強いられる人々の側に立って活動をしている。しかし、各団体は、その活動方針の違いから、衝突したり離反したり、ときに拮抗したりする実態がある。行政との恒常的な窓口をもつ「笹島連絡会」の役割は大変大きい。だが、「支援」「ボランティア」に対する考え方はそれぞれであるものの、「かわいそうな」対象としてのホームレスに「してあげる」という、ボランティア精神から脱却する必要がある。大西のいうように「炊き出しをしないで済む社会をつくるために炊き出しをする」という社会づくりを目指していくべきだろう。

ベトナムの首都ハノイでは、支援がインフォーマルのかたちで生活そのものに根付いている。NPO 団体など組織化する必要はない。盲人がモノを売り歩いていけば、都市民がずっと寄って買う。富裕層が集まるカフェには、高齢者がモノを売りに来る。客は、さっと代金を出す。そこに、枠組みや閉じた空間はなく、あらゆる階層の人びとは何らかの形で複合的な結節の都市に包摂されているのである。

その一例が、卸売市場と販売員としての雇用である。ハノイは経済発展し、単純労働に機械の導入も可能である。しかし、卸売市場での単純労働は人の手でおこなうことで、都市部での雇用を生み出している。たとえ村の友人ネットワークがなくても、天秤担ぎの仕事から都市ネットワークを築いたりその中に入ったりして、そこから都市民衆ネットワー

クに包摂されると、信頼を得て収入につなげることもできる。都市と村落は結びつき、雇用を広げ、街の経済発展、ひいては村の経済にまで浸透している。つまり、都市民衆は世界のグローバリゼーションを自分の都合に取り込み、出稼ぎ労働者を取り込んで、都市経済を発展させているのである。都市ハノイに、差別の視線があろうと都市民と村落民が当たり前のように「共生」していく社会のモデルがあり、ホームレスを生み出さないセーフティネットワークが網羅されていると言える。相互扶助の在り方を、「劣っている」と捉えがちな新興国から、私たちは学ぶべきなのである。

参考文献

- 朝日新聞2014.6.1 朝刊「東京照射 缶集め生活と条例のはざま」
 青木秀男2010『ホームレス・スタディーズ』ミネルヴァ書房。
 大西豊「笹島労働者会館21周年に寄せて」10-13。
 島和博2003「共生社会における『ホームレス問題』」野口道彦・柏木宏編『共生社会の創造とNPO』pp.145-177. 明石書店。
 笹島日雇労働組合2014.6.25『後援会ニュース』no.60。
 中日新聞2013.9.14 朝刊「統計上では減少孤立防ぐ対策を」
 長坂康代2013「ベトナム北部の茶文化—首都ハノイを中心として—」『ヒマラヤ学誌』第15号、京都大学ヒマラヤ研究会、184-192。
 長坂康代2013「ベトナムの首都ハノイの経済活動における商民俗とコミュニティ形成—旧市街ハンホーム通りの『掛け売り』をめぐる都市人類学—」『比較民俗研究』第24号、55-69。
 西澤晃彦1995『隠蔽された外部』彩流社。
 藤井克彦・田巻松雄編2003『偏見から共生へ—名古屋発・ホームレス問題を考える』風媒社。
 丸山里美2013『女性ホームレスとして生きる—貧困と排除の社会学』世界思想社。
 渡辺芳2010『自立の呪縛—ホームレス支援の社会学』新泉社。

付記

大西豊氏、えぐれ笹島氏をはじめ笹日労の各組合員に大変世話になった。机上論ではなく、実際に活動に参加することで、「支援」「相互扶助」についてベトナムの事例と比較しながら考え、フィールドワークの大切さを改めて感じた。また、ハノイでは、リュエンとともにロンビエン市場で一労働者として働き、周囲の多くの出稼ぎ労働者にも受け入れてもらってきた。名古屋・ハノイ、双方でよい機会を与えてもらったことを、この場を借りてお礼申し上げます。

ⁱ 1943年生まれ。京都大学を卒業後、法律関係出版社に就職。1972年から1977年まで、釜ヶ崎「あいらん地区」で就労、活動。その後、1977年に名古屋「笹島」に移り、「笹日労」を結成。笹島には、すでに、野宿労働者の支援団体があったので、それと一緒に活動を始めて現在に至る。1987年には、「あるすの会」(滞日アジア人労働者と共に生きる会)を結成した。

ⁱⁱ 名古屋でも、愛知万博開催に合わせて白川公園でのホームレスを強制排除したことは記憶に新しい。

ⁱⁱⁱ 名古屋では、1998年2名、2002年3名が襲撃により死亡している。

^{iv} 12年間、歌とパフォーマンスによって、名古屋を中心に各地で、社会の理不尽な現状と救済を求めて社会に訴えた。ホームレス支援も、その一環であった。

^v 笹日労は、2014年6月に若宮大通高架下(ゲートボール場)での軽食の配布を4か月ぶりに行った。このとき、中学同級生からの炊き出し用カンパにより、えぐれによる手作りの蒸しパンと茶が日雇い労働者やホームレスに配布されている。

^{vi} 2012年9月にNPO法人「ささしまサポートセンター」を設立した。

^{vii} 名古屋での越冬闘争は、冬を越せずに名古屋駅周辺で10数名の死者が出るという新聞記事が発端で、1976年1月から5月まで始まった

^{viii} 2013年度は、12月11日に越冬前段集会(於名古屋市教育館)、12月20日に名古屋市、12月18日に愛知県と労働局との交渉が行われた。

^{ix} リヤカーを市場で借りると170,000ドンかかる(2008年9月時点)。



写真1 出稼ぎ労働者の仮住まい (2007.4)



写真4 仕事後の精算 (2012.8)



写真2 市場労働ガイン (2008.3)



写真5 左から元販売員、荷物運搬バイク、
家族販売員、リュエン、他店の店主 (2008.3)



写真3 荷物運搬をする出稼ぎ労働者たち
(2010.10)



写真6 茶屋でくつろぐ出稼ぎ労働者たち
(2009.3)

